

平成30年度 前期学校関係者評価書

平成30年9月4日

南アルプス市立白根源小学校関係者評価委員会

記載責任者 教頭 小西一彦

【第1回 学校関係者評価委員会】

1 実施日：平成30年8月31日(金) 19:00より

2 会場：南アルプス市立白根源小学校 会議室

3 参加者：学校関係者評価委員

学校関係者評価委員		
前源地区連合自治会会長 甘利 元	主任児童委員 矢崎 栄子	元PTA役員 井上 範子
元PTA役員 深澤 リエ	元PTA会長 櫻本 寛一	源地区連合自治会会長 塩谷 正夫
源地区育成会長 小澤 順司	PTA会長 小林 正紀	
校長 加賀美 敏	教頭 小西 一彦	教務主任 相川 也寸志

出席者 計10名

欠席者 計1名

4 学校側から提案された内容

学校関係者評価委員会次第

◇ 次 第

進行・記録：教務主任（相川）

1 はじめのことば	教務主任（相川）
2 学校長あいさつ	校長（有野）
3 学校評価結果及び概要説明	
①自己評価（教職員）結果	教頭（小西）
②児童アンケート結果	教頭（小西）
③質疑応答	教頭（小西）
4 意見交換（参加者からの提言等）	座長：教頭（小西）
5 おわりのことば	教務主任（相川）

□ 次 回

第3回 学校関係者評価委員会

日 時 平成31年1月17日（木） 12:10 会議室 （給食試食含む）

5 協議内容・意見

○南アルプス市立白根源小学校前期自己評価書に関する考察

教職員・児童アンケートの考察／改善方策に対する検証

(1) 学校側から提案された前期全体評価考察

① 前期自己評価 全体評価

<p>・全体分析</p>	<p>今年度も昨年度同様、評価項目を見直し、同様な内容を削除または構成し直し、昨年度までの37項目から15項目とした。再度改善を施し、PC上から打込み、自動的に数値化及びグラフ化できるようにしたことで職員も短時間で評価できるように改善を施した。評価する側も、評価を分析する側も短時間で能率的に取り組めるように考え、取り組んだ。昨年度同様、自己評価や職員会議等での職員の意見を参考にして、PDCAを確実に実践に結び付けられるシステムを今後も検討していきたい。評価は、 Aよくあてはまる Bややあてはまる Cあまりあてはまらない Dまったくあてはまらない とし職種によってあてはまらない場合もあるので Eあてはまらないを設けてある。</p> <p>集計結果からは、全ての項目に対して、肯定的な意見が大半を占めた。学校長が描いているグランドデザインが職員に浸透していることを意味しているのではないだろうか。2学期以降もグランドデザインを意識して学校教育目標に近づけるように取り組んでいきたい。</p> <p>職員の取組姿勢は様々な場面において協力的であり、それが全校児童に伝わり、5分前行動、無言清掃等の姿に表れている。縦割りにおける活動も全学年がお互いに顔と名前を知って仲よく活動している。組織が、目標に向けて、協力的に取り組まれている様子がよくわかる。職員も児童も力を合わせて、目標に向けて取り組んでいることは素晴らしい一言に尽きる。</p>
<p>経営校 方教育 方針・目 標 校運 営</p>	<p>1-7 全て肯定的な意見で占められている。特にNo.3「校務分掌に基づき、組織的に学校運営を進めることを心がけている。」については、全職員がA評価であった。しっかり意識をもって1学期は取り組めていたといえる。 B評価は、No.2「マネジメントサイクル（PDCA）で、常に改善を図ろうとしている。」 No.6「教育公務員として危機管理（防災・防犯・個人情報・網紀保持）を意識し、教育活動等に当たっている。」について目立っている。学校全体としては、改善を図ったり、最新情報を提供したりして共通確認を進めているが、職員自身が取り組み策を考え、実践に結びつけるという面において、十分に取組を果たしているという自信が持てないのではないかと推測される。 全職員がチーム源で協力的に取り組んでいる姿は、No.7「チーム源として、職員が共通理解のもと、指導に努めている。」No.4「他の職員と、相互理解・信頼関係を深め、教育活動にあたっている。」の評価に如実に表れている。うれしいことである。</p>
<p>学習 指導</p>	<p>8-11 全て肯定的な意見で占められている。 しかし、No.11「家庭との連携を図り、児童の学習習慣が確立するよう配慮している。」において、B評価が12となっている。（約70%がB評価となっている。）昨年度より自主学習に取り組む児童は増えてきている。しかし、家庭での理解や取り組みについては、教師が家庭との連携という面でまだ課題があるからだと考えられる。 全体的には、一人ひとりわかる授業実現に対して目標を持って努力していることがわかる結果が出ている。実際に自己観察書における目標に向けて取り組んでいる様子が見られている。また、個別指導やTTも丁寧に行われおり、日常きめ細かな指導が実践されている。No.8「適切な児童理解に基づき、ルールとリレーションのある学級・学校づくりに努めている。」No.9「基礎・基本の確実な定着に対して、きめの細かい指導をしている。」で全職員がA評価であることから明らかである。</p>
<p>児童 理解・ 生徒 指導</p>	<p>12-14 全て肯定的な意見で占められている。 しかし、No.13「生指・特別支援体制を通じての組織的体制から、児童特性に応じた指導方法の工夫や改善に努めている。」でB評価が50%を占めている。昨年度より個別のケース会議を増やし、他機関の連携も増やしているが、実際に児童の変化が取組後すぐに見られるわけではないので、不安や悩みが生じているのではないだろうか。特別支援教育や生徒指導については、観察-分析-取組の繰り返しが必要であり、中には連携機関とのつながりで分析-取組を進めなくてはならないので、すぐに「この方法があてはまる」という処方箋的な方法はないので、今後もケース会議の中で検討し取組を考えていきたい。 白根源小学校の良い部分として、全校児童の力で基本的な生活習慣性を身に付けていくことが挙げられる。無言清掃、縦割りの活動を通して高学年から低学年へいい形が繋がっている。規範意識を持った風土が形成され、いじめ、不登校の未然防止につながっているといえる。</p>
<p>保護者・ 地域 連携</p>	<p>15 全て肯定的な意見で占められている。 No.15「保護者・地域に対して誠実に関わり、保護者・地域及び関係機関との連携・協力体制の構築に努めている。」にB評価が約40%占めている。昨年度もそうであったが、保護者や地域がかなり様々な場面で協力的であるにもかかわらず、B評価が多いということは、意識して保護者や地域にアプローチしていないことを意味しているのかもしれない。特別に仕組んでいるわけではないために職員一人ひとりの意識が強くないのかもしれない。しかし、職員個人で全て連携しているわけではなく、学校全体としてそれぞれが役割も持って連携していることをわかっしてほしい。 今年は、農業体験や環境整備、防災等で新たな連携を仕組み、拡大しているだけに、ボランティアも含めた活動を見直し、積極的な活動に結び付けていきたい。どんなつながりを持てるのかも職員に説明し、チーム学校の意識を高めていきたい。</p>

② 前期児童アンケート全体評価

<p>18項目中ほとんどが肯定的な意見であった。（A評価+B評価）職員の自己評価分析同様、授業や生活場面で頑張っている様子が伺える。また、家庭での生活も安定しているといえる。「学校が楽しいか」「授業が分かるか」についても90%以上の肯定的な意見が児童にも意識されている。教師も指導については意識して工夫して授業しているだけに、子どもたちにかかる授業が浸透していると考えられる。こうした居場所と出番のある学校生活が子どもたちに意識されていることは本当にうれしい結果であるといえる。 C評価+D評価が10%以上を課題として挙げてみると、No.1「学校が 楽しいですか。」9.7% No.3「授業中に 質問や 意見を いいますか。」27.4% No.7「学校では ほかの学年のお友だちと 遊ぶことができますか。」17.7% No.8「こまったときに 話せる友だちがいますか。」14.2% No.14「地域のひとと 出会ったら あいさつを していますか。」9.7% No.16「家のひとと 学校でのことを 話していますか。」13.3% No.17「家のひとと さいかい（地震・台風・火事など）が起こったときのことを話していますか。」28.3%の項目で見られる。昨年度と比較すると児童も違うので一概には言えないが No.7「学校では ほかの学年のお友だちと 遊ぶことができますか。」 No.16「家のひとと 学校でのことを 話していますか。」 No.17「家のひとと さいかい（地震・台風・火事など）が起こったときのことを話していますか。」で改善が見られる。特に防災については、危機管理室との連携で改善が見られ始めている。（45.5%→28.3%）逆に、%ダウンした項目については、2学期の取組やQ-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)分析と合わせて改善を試みていきたいと考えている。No.1「学校が 楽しいですか。」に対しては、Q-U分析や学級力アンケート結果分析から、必要に応じて個別対応していきたい。No.3「授業中に 質問や 意見を いいますか。」については、地域の人へのあいさつや学校生活における機会における対人関係を重視していくことで人前での発言に自信を持たせていくことも大切であり、こうした場面での工夫した指導をそれぞれ考え取り組んでほしい。</p>
--

(2) 意見交換(参加者からの提言等:質問を含む)

①学習指導についての質問

児童一人ひとりを大切にしていることは、本当にありがたい事であり、先生方に感謝していません。具体的にどのように関わっているのでしょうか。



担任は、一人ひとりに分かる授業を日々工夫しています。また、担任の指導に沿って市単教員や非常勤講師が児童の実態に合わせてきめ細やかな個別支援を進めています。

子どもたちの中にも、様々な要因のために、授業に向き合えないケースもあるので、管理職も含めて、対応を積極的に進めています。不登校傾向等が見られる時には、管理職も家庭に出向いて、コミュニケーションを図りながら、寄り添って気持ちを学校に向かせる取組もしています。

より児童や保護者寄り添うために、SCやSSW等の関係機関との連携を積極的に行い、生徒指導・特別支援教育体制において、「チーム学校」体制で支援をより深いものにしていく努力を積み重ねています。

②「人事評価」と「自己評価」について

人事評価と自己評価結果との関わりはもたせているのでしょうか。



学習指導の評価の中で自己観察書における目標に向けて取り組んでいる様子が見られると評価しているように、人事評価の中で職員一人ひとりに今年度の目標と手立てを立案してもらっています。確かに学校評価項目で自己目標とリンクして評している職員もいると考えられます。

しかし、自己評価結果は無記名で記入しているので具体的にリンクして管理職がアドバイスを与えることはできません。全体結果から確認や様子などは個々の面談等で一緒に考えていくことはできるので、今回の質問を生かせるように日々の授業実践、生活場面での指導を通してアドバイスをしていくなど工夫してきたいと思えます。

③学校教育法第42条「教育水準の向上」について

法的に教育水準の向上が明記されていますが、具体的にどのように水準を向上させていますか。



教育水準を向上させるために学校評価が必要であり、P(計画)－D(実践)－C(チェック)－A(改善)のサイクルでよい方向に導いていかなければなりません。そのためにも自己評価やアンケート結果を通して関係者評価委員会でのアドバイスが大事になります。学校関係者評価委員会におけるアドバイスを検討し、学校における教育課程、人事管理、物的管理等で改善を試み、教育水準の向上を図っていきます。

教科領域における個々の教育水準を向上させていくことは大事です。「関わり合って共に学び高め合う」授業づくりで一人ひとりに分かる授業実践で向上に努めています。また、教育は学習面だけではないため生活面における向上にも努めていかなければなりません。給食、清掃をはじめとした集団における生活を身に付けていくことも見逃すことはできません。本校は、生活面も常に大切な要素として、日々の授業の中で重要視しています。また、児童数は少ないが、全員が名前呼び合える環境の中で児童同士の取組も大きな成果を上げています。1年生が入学時よりも、スムーズに生活出来ているのも教師の指導のみならず、縦のつながりの深まりが大きな要因となっています。

こうした教師－児童－家庭－地域のつながりを深め、教育の向上を白根源小学校は目指していきたいと思えます。

④「ゆとりある学校にするために」

＊質問に出た中で、教師の日々の大変さがクローズアップされたことを受けて、意見交換を行いました。

■多忙化について

・評価全体に良い評価になっており、教師一人ひとりが児童のために日々頑張っていることがよくわかりました。しかし、頑張っている裏には放課後子どもたちと触れ合う時間も限られ、家でも仕事を持ち帰らなければならない現状があるのではないのでしょうか。そうした現状がニュースで飛び込んでくるUSB情報漏れ事件などにつながっているような気がします。職場がおだやかな環境、ゆとりがある環境で教師が児童のために向き合えるために、教師の増員を何とかしてあげたい。

・目標がたくさんありすぎると焦点がぼやけてしまう事もある。職員が何を重点的に取り組めばよいか見えなくなってしまうことがあるので、目標を絞って、取り組むことも大事ではないのでしょうか。

・事務的な仕事が多いような気がするので、減らしていき、子どもたちと向き合える時間を確保していくことが大事ではないだろうか。

・学力的な部分以外にも生活力の向上も大切ではあるが、本来家庭が受け持つ部分が薄くなり、学校におかませる部分が増えていることも多忙化につながっているのではないだろうか。

・課題を絞っていくことでPDCAにつながっていくといえる。例えば「学校は楽しいですか」という問いに対しては、その子も気持ちや性格からも評価は分かれてしまう。改善すべきところはどこなのかをしっかりと見極める必要があるのではないだろうか。また、改善するだけでなく良い部分をさらに伸ばしていくことも学校ではないだろうか。



学校の立場を関係者のみなさんが理解して下さっていることは本当に職員も大きな励みとなる。

学校としても、事務的な部分を効率よくするために、この学校評価においても、自動に集計、グラフ化ができるように工夫し、質問の項目を減らし負担をかけないようにたりしてきました。また、勤務時間を把握し、教師一人ひとりが勤務を意識していく取組も始めました。人事評価でも具体的な目標と手立てを大事にして、焦点を絞ることで、全てに取り組むのではなく、今年度の成果を出せる工夫もしています。しかし、まだまだ、改善の余地は様々な分野で存在していると考えられます。

今回のアドバイスを生かしていくためにも、改善計画の確実なる実施をし、改善を図っていきたいと思います。

■ 家庭との連携について

①現状・課題について

・自分たちが子どもの頃とは親の意識が変わってきているのではないだろうか。ニュース等でも言われているが、親が自分ことよりもまず先に子どもに向き合うことが当たり前だったが、最近は、まず先に親がやりたいことが優先されてしまい、子どもたちが置き去りにになっている。

・親が子どもたちと向き合っていない現状があり、子どもも親をかばっているのか、甘えているのか周囲から見えにくい部分が増えてきていると思う。全国的に見られているだけに何とかしないとイケない。

・親が向き合わないことから子どもたちが誰を信用したらよいか見えなくなってきたのではないだろうか。社会に出た時に大きな問題になるのではないだろうか。

・親が手を出し過ぎて、自分から物事を取り組めない子ども、また逆に親が放任的で、何を指針に取り組めばいいのかわからず悩みを抱え込んでしまう子どもがいる。こういう事からもしっかり子どもの様子を見極め、子育てをすることが大事ではないだろうか。

・昔と今では生活環境が違い、「こんなことまで言わないと分からないのか」という大人が増えてきているような気がする。学校だけの問題ではないが家庭や地域も巻き込んで教育を考えていく時期になっているのではないだろうか。

・子育てで困ったり、悩んでいる家庭は、周囲からはなかなか見えづらい。学校評価では困り感のある児童は少ないので、その子たちを巻き込んでいくことで全体が良くなっていくのではないだろうか。地域全体に課題がある場合とは異なるので。

・親は自分の子だけの物差しで見えてしまうが、学校はいろいろな子どもたちがいる中で公平な物差しで見ることができるので学校の存在は大きいと思う。

②意識を高めるためには

・学校を中心に保護者を巻き込んで意識を高めていくことが大事ではないだろうか。地域も協力、連携していくので是非、遠慮せず声を掛けてほしい。

・なかなか巻き込むのは大変ではあるが、親を対象とした講演会もどうだろうか。

・仕事の都合で平日では開催しても来にくいので、工夫がかなり必要になってくる。

・見過ごすわけにもいけないので積み重ねていくことが大事ではないか。

・協力連携できるのが「源」の良さだけに、課題を一つずつ解消し、レベルアップしていきたい。

(3) 総括

学校関係者評価委員より今回も貴重なご意見をいただいた。

学校の多忙化は、地域でも理解されてきつつあることがよくわかった。子どもと向き合う時間の確保を家庭も地域も願っている。全てにおいて実現することはできないが、「効率化」をキーワードに職場環境改善を進めていかなければならない。どの部分を改善していくのか学校評価の声を大事にして着手していきたい。

今年度は校内研究会でも教育環境部会が発足し、環境の見直しを進めて、事務職員による予算要求方法の改善を始めとしていくつかの改善を試みている。一人ひとりが「学校って変わることができるんだ」という意識を持ち、声を出していくことで、働きやすい職場になっていくのではないだろうか。それは、子どもたちのために直結していくだけに無駄ではなく、大事な事である。

次に保護者、地域との連携についてであるが、全国的な大きな課題ではあるが、ご意見の中で、「源」だからこそできる部分があるという声があった。まさにその通りであり、保護者、地域を巻き込んだ意識改革は可能かもしれない。PTA、育成会、自治会等協力して下さる方々がたくさんバックに存在しているのは心強い。今年度は、1-2年が保護者への意識を高め、協力していけるように社会教育課の協力を得て、親学習プログラムを開催したが、学校-保護者-地域との連携から一つになっていける体制づくりを一つずつ積み重ねていきたい。

白根源小学校は、小さな地域であり、他地域とのつながりを深めさせていくことが子どもたちの学びには大切である。そのためにも、地域との協力・連携は不可欠である。教師の地域との協力・連携の意識を高めていく工夫や地域人材を活用して子どもたちに専門的な分野で教えていくことも大事である。5年生の水田の取組では、PTA会長やにこにこサロンの方々がバックアップしてくださっているし、6年生も短歌の学習にゲスト授業を試みたり、陸上では専門家の協力を得て取り組む予定である。これまでも、文化財課、合唱の埴原先生などの協力で地域とつながりを持たせて子どもたちの学習に協力していただいていたが、これからさらに興味関心を深めていく授業に地域の力を借りていくことも重要になっていく。